

石田三成の腹心 嶋左近の（直筆？）書状発見

石田三成の腹心として知られる嶋左近が出した書状が初めて発見された。これまで真偽の不確かな断簡しか知られていなかったが、今回大阪府の民家から完全な形態のもの2通が発見された。

※嶋左近とは 「三成に 過ぎたるものが二つあり 嶋の左近と 佐和山の城」
関係史料はわずかで、それも記録や石造物にその名が見られるのみで、存在は確かであるものの、実際の具体的な動向は不明。現在知られている逸話類も、信頼できる史料に基づくものはほとんどない（関係文書は2通（原本1・写1）が知られているものの、発給文書はなし）。

〔経緯〕 東京大学史料編纂所が、豊臣秀吉関係史料の調査のため大阪府の民家を訪れたところ、2通の嶋左近文書を発見。史料編纂所で簡単な修復を施すのと並行して、石田三成研究の中心であり、唯一嶋左近の名が記されている文書を所蔵し、かつ従来より協力関係にある長浜城歴史博物館と共同調査・研究を行った。その結果、嶋左近の出した書状に間違いがないことが確認された。

〔内容〕 1590（天正18）年、秀吉が小田原北条氏を滅ぼし、続いて東北征伐に向かう間に出されたもの。嶋左近が、秀吉に臣従することとなった常陸佐竹氏との交渉に当たっている（当時宇都宮近辺に在陣）。

1通目は常陸の名族大名である「大掾氏」が京都に人質を出すことを渋っており、その処置について嶋左近が佐竹氏に問い合わせている書状（7月19日／重臣小貫氏あて）。
2通目は、常陸における統治方法と、関東への国替えを拒否した織田信雄が佐竹氏へ預けられており、その扱いについての指示を与えた書状（同25日／一族佐竹義久あて）。

- ・いずれも石田三成の配下としての行動かと思われる。
- ・秀吉に目通りできる地位にあった（2通目）
- ・自筆の可能性はある。

〔意義〕 これまで実態がほとんど不明であった嶋左近の具体的な存在・動向を明らかにする極めて貴重かつ重要な史料。関ヶ原合戦の際の活躍から、どちらかという「猛将」（＝「武」）という印象であったが、実際は、東国大名との外交交渉を担当する「官僚的」役割（＝「文」）も勤めていたことが判明した。また、秀吉政権の東国統治方法の具体相を知る上でも貴重。

- ・嶋左近清興の存在・実名を決定づける史料。

（茨城県／佐竹氏研究者むけ）

*大掾氏はこの日付の数ヶ月後、佐竹氏に滅ぼされるが、それまでは秀吉政権に取成を頼むなど、必ずしも敵対していた訳ではなかったことが分かる。秀吉政権の命令を聞かない大掾氏を佐竹氏が滅ぼすよう命じられた可能性。